

連絡会ニュース

子どもと教育・くらしを守る広島県立学校教職員連絡会

No.1347 2025/08/27(WED)

発行 広島高校連絡会事務局

Email renraku-kuko@mx6.tiki.ne.jp

HP <http://ww6.tiki.ne.jp/~renraku-kuko/>

携帯 090-1180-7644 (村井義幸)

090-9738-8264 (望月照巳)

8月を振り返るーキーワードは「語り継ぐ」!! ～ 政治家の靖国神社参拝のまやかし ～



被爆者張本勲さんの証言は重い！

全国戦没者追悼式で天皇のことばに「戦中・戦後の苦難を今後とも語り継ぎ」という言葉が新たに加えられことがニュースになりました。8月のテレビ、新聞でも、被爆者の平均年齢が86歳を超えたことや昨年の被団協のノーベル平和賞受賞を受けて、「被爆や戦争体験をどう語り継ぐのか」ということを強く意識した報道が多かったように思います。

その中で元プロ野球選手の張本勲さんの話が衝撃でした。張本さんは広島でお姉さんを原爆で亡くされています。全身に火傷を負った6歳上のお姉さんは、投下後2日たって担架で運ばれてきたそうです。「その姿を見て声がでませんでした。『これが俺のお姉ちゃんか』と。焼けただれて、顔も体も。お袋は愛娘をみながら、お袋も声もでませんよ」。5歳の張本さんが、優しくした姉のためにできたのは、ブドウのつぶを口元にあててあげることだけだったと言います。

張本勲さんは、半世紀以上もその経験を誰にも語れなかったと言います。「原爆症を持ってる男だと思われるのは嫌だし。うつりはしないけれど、子どもの頃、差別されたところを見ているから。言わないほうがいいだろうと…。」

ところが、60歳の頃、テレビで若者が原爆について話す場面に衝撃を受けたそうです。「(テレビで)『戦争を知らない』『(原爆が)どこに落ちたの?』という人がいたんですよ」「びっくりして、原爆を受けた人間にしたら。この国はだめになると思って。これはだめだと。若い人にもちゃんと語り継いでいかないといけないんだ」と思い、それまで一度も行くことができなかった原爆資料館にも足を運ぶようになり、原爆体験を話すようになったそうです。

「核武装は最も安上がり」という参政党のさや(本名・塩入清香)の軽い発言について張本さんは「あなたの親族がそうになったら、それでもあなたは承諾するの?と問いたい」などと、語りました。被爆体験者としての張本さんの発言は重い。

もう一つ、8月15日靖国神社を参拝した政治家たちの発言と行動があまりにも軽くて、怖さを感じました。

「ソンスウノネンヲモッテアイトウノマコトラササゲタ」???

靖国神社に参拝した多くの政治家の口から発せられた舌を噛みそうな言葉です。自民党の高市早苗は「たくさんの方が国策に殉じられた。尊崇の念をもって哀悼の誠を捧げた」と述べ、小泉進次郎も「初当選以来、毎年の行動だ。不戦の誓いと、国家のために命をささげた方に対する礼を忘れないことは重要なことだ」と述べています。日本保守党の百田尚樹も「戦後80年であり日本のため戦って命をなくされた英霊に手を合わせてきた」。参政党は全国会議員と地方議員88名が集団参拝。参拝が一つの「政治的デモンストレーション」と化し、「首相の参拝」まで求めています。

国(日本)のためにたたかって死んだ人を悼むのがどこが悪い、「当然なこと」という政治家たちの言い分には、靖国神社の本質を隠す(知らない?)まやかしがあります。



まやかし その1～「靖国」は単なる神社ではない！

靖国神社の前身は 1869 年設立の「東京招魂(しょうこん) 社」で、幕末の内戦で戦死した新政府軍の将兵をまつり、1879 年の明治天皇の勅命で「靖国神社」に昇格。天皇・国に忠義を尽くし「名誉の戦死」をした軍人などを「護国の英霊」としてまつるためにつくられたものです。明治天皇制政府を作るために奔走した吉田松陰、坂本龍馬などは靖国神社の祭神となっているのに対し、最大功労者である西郷隆盛は、時の政府にたてついたとして靖国神社にはまつられていません。被爆者や、空襲で亡くなった人々、沖縄で亡くなった住民などもまつられていません。

戦後も、日本の侵略戦争を「自存自衛の正義のたたかい」「アジア解放の戦争」と美化する「靖国史観」を世界に発信している運動体で、一般的な宗教法人でも戦没者追悼の施設でもありません。そのような「靖国」の歴史を隠して、「国のためにたたかって命を落とした人を弔う」ために参拝するのは、侵略戦争を美化する自らの意図を隠すまやかしです。本当に国のために戦争で亡くなった人を悼むなら、靖国神社でなく、無宗教の国の追悼施設を作るべきです。

まやかし その2～靖国神社はA級戦犯を合祀(ごうし)している

靖国神社は 1978 年、東京裁判で戦争指導者として死刑になった東条英機元首相ら 14 人を、戦争犯罪の「ぬれぎぬ」を着せられた「昭和殉難者」として合祀しました。このため、靖国神社に合祀されている戦没者の遺族にも、複雑な思いをもっている人は少なくありません。

閣僚や国会議員が、侵略戦争を賛美しA級戦犯を合祀する靖国神社に参拝することは、侵略戦争を肯定し、その責任者をたたえる意思を国内外にアピールするものといわなければなりません。日本が無条件降伏文書として受け入れたポツダム宣言には、侵略戦争を推進した軍国主義勢力を「永久に除去」と明記しています。靖国神社への閣僚や国会議員らの参拝は、同宣言を真っ向から拒否し、戦後の世界秩序に挑戦するもので、憲法が定める政教分離原則(20 条 3 項)にも反し、平和主義(9 条)を大きく突き崩すものです。

また、何よりも侵略戦争の被害者であるアジアの人々や日本国内の犠牲者を踏みにじるものと言わなければなりません。

まやかし その3～戦争で亡くなった人たちは「名誉の戦死」「英霊」なのか？

戦争で亡くなられた人たちは、本当に自分の死を「英霊」「名誉ある死」と思うでしょうか。安倍や高市や小泉、百田のような政治家が、一方的に恣意的に「英霊」と祭り上げようとしているだけではないか。

日中戦争以降の軍人・軍属の戦没者数は約 230 万人。研究者によるとこのうち栄養失調による餓死者と栄養失調に伴う体力の消耗の結果、マラリアなどに感染して病死した広義の餓死者の合計は 140 万人、全体の 61% に達すると推定されています。自殺者も相当数おり、いずれも世界の戦争史を見ても異常な高率だったといえます。あまりにも情けなく悲しい死です。このような人たちが、自らを「名誉ある死」「英霊」だと思はずがありません。

戦死者の中にたくさんの「千尋」がいたはず…

ドラマ「あんぱん」の 54 話、主人公たかしと弟千尋が別れるシーンです。海軍士官になった弟千尋とたかしが感情をぶつけ合う圧巻の 15 分間でした。最初は「日本の美しい山や海、愛する家族を守るため、立派にたたかう。そのためだったら命も惜しゅうない」と言っていた千尋が、兄と話す中で心の中を吐露します。おじさんのことばを思い出しながら「何のために生まれて、何をして生きるがや。わからんまま終わるなんてそんなのいやじゃ」と叫び、

「この戦争がなかったら、わたしはもっと法学の道をきわめ、お腹をすかせた子供らや虐げられた女性らを救いたかった」

「この戦争がなかったら、いっぺんも優しい言葉をかけちゃれなかった母さんに親孝行したかった」

「この戦争がなかったら、兄貴ともっと何遍も酒を飲んで語りたかった」

「この戦争さえなかったら、愛する国のために死ぬより、わたしは愛する人のために生きたい」

…戦争で死んだ若者の中にはたくさんの「千尋」がいたはず。戦争によって生きる希望を奪われた人たちを「英霊」と祭り上げるのはまやかし。怒りさえ感じます。

不断の学習と発信こそ～「語り継ぐ力」

参議院選挙で参政党から出馬して当選した初鹿野裕樹(はじかのひろき)は「南京大虐殺が本当にあったと信じている人がまだいるのかと思うと残念でならない。日本軍は『焼くな、犯すな、殺すな』の三戒を遵守した世界一紳士な軍隊である」と言ってはばからない。時代錯誤の暴言を繰り返している参政党の神谷代表は、治安維持法について「悪

法、悪法だっていうが、それは共産主義者にとって悪法でしょうね。共産主義を取り締まるものですから」などと演説しています。治安維持法が、共産主義者だけではなく、労働組合、宗教者、社会民主主義者など弾圧の対象を無制限に広げていった歴史の事実を無視し、「希代の悪法」といわれる弾圧立法をあからさまに正当化しています。靖国神社の問題、南京大虐殺、治安維持法の問題、そして日中戦争、太平洋戦争の侵略戦争としての本質は、一部の政治家や、日本会議のような歴史修正主義者がなんとおもうと、歴史研究者の間では決着ついている問題です。しかしあの沖縄戦を愚弄した自民党の西田昌司のように自分の都合のいいように「歴史を書き換えよう」とする動きは繰り返し起こってきます。しかも参政党のような国会で一定の議席を有する勢力が、平気で歴史のねつ造を発信する危険な状況も生まれています。

渋谷の若者にアンケートをしたら、8月15日が何の日か知らない若者が4割いたという現実もあります。知らなければ「興味・関心」も起こるはずありません。もっともらしい政治家や歴史修正主義者の言辞やフェイクは国民の中にすっと入っていきます。知らないと簡単にだまされます。

私たちが語り継がねばならないのは、被爆(戦争)体験者からの実相の記憶と同時に、被爆(戦争)の歴史的事実(知識)であることを痛感します。そのためには、学校での平和教育、歴史教育の充実が求められますが、私たち一人一人も歴史の真実はどこにあるのか不断に学習し発信しなければなりません。でないともうにも軽く「あったことがなかったこと」にされてしまう！」

(本間 英次)

【参考資料】この原稿は『日本軍兵士ーアジア・太平洋戦争の現実』(吉田裕著・中公新書)、

テレビ番組『あんぱん』、『サンデーモーニング』、しんぶん赤旗記事などを学習、参考に書きました。

六文銭

▼広島カープは、8月6日の試合を「ベースナイター」として特注のユニホームを着て試合に臨み選手たちも口々に平和であつて野球のできる幸せを感じています」とアピールする▼また、サッカーチームも折り鶴タワーでのセレモニーに参加して平和を訴える▼これまでそれらの取り組みを見て、すばらしいなと思っていたけれども、現在のように「平和」を壊そうとする動きが、活発になつてきているのにそれは放置したまま、平和ついでね。で終わるのではなく、平和は戦争を起こそうとする動きやその首謀者たちを許さない行動と発言で守れるのだと考えるようになりまして▼だが、それもない物ねだり、と言うより自業自得なのかもしれない、広島県立学校から、あの「是正指導」をきっかけにして平和教育も解放教育と共に姿を消しました▼そのは、私たちは、やめるべきものと、発展させるべきものを、ごちゃ混ぜにするよ」と声を上げるべきでした▼そして、平和教育の深化発展への反省もあります。優れた原爆映像や戦争映像を生徒たちに提供し続けては来ましたが、再び、政府の行為によつて戦争の惨禍が、おきることのないよう「考え行動出来る生徒の育成が出来ていたか、反省する点もあります」▼ともあれ、戦後民主主義を帳消しに葬り去ろうとする策動を粉碎するため、全力を尽くす決意です。

2025/0827

【訂正】先週号の「六文銭」の中で次の誤りがありました。お詫びして訂正します。誤「元町高校」→正「基町高校」